

了巷説百物語

京極夏彦

Natsuhiko Kyogoku

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

了菴説百物語◆目錄

辰巳乃章

葛^{くす}乃^の葉^は或は
福神ながし◆五〇九

寅卯乃章

手^て洗^{あら}鬼^いおに◆六九三

子丑乃章

野^の宿^{じゆく}火^び◆九九一

空亡乃章

百^{ひやく}物^{もの}語^{がたり}◆二二三三

戌亥乃章

於^お菊^{きく}蟲^{むし}◆七

申酉乃章

柳^{やなぎ}婆^ば◆二五三

午未乃章

累^{かさね}◆三三九

了菴說百物語



戌亥乃章

人
灰
菊
虫
振

おきくむし



◎於菊蟲

◎於菊蟲おきくむし

皿屋敷さらやしきのことは
犬ういぬつ童わらべだも知れ、バ
こ、にいはず

繪本百物語／卷第四・第三十
桃山人・竹原春泉／天保十二年

下総国酒々井宿に、とうか藤兵衛という男がいた。
 とうかとは、稲に荷と書く。

これはいなりと読むのが普通であるが、音読みにしたとて意味が変わる訳ではない。

しかし藤兵衛は神信心仏信心には甚く無頓着であり、宮に参ることも寺に詣でることもしなかつたし、家には神棚も仏壇さえもなかつたという。況て、稲荷大神を奉じている様子などは微塵もないものと思われた。

何故ならば、藤兵衛は狐を狩るのを渡世としていたからである。いうまでもなく狐は稲荷大神の御使、その狐を屠ることを生業としていたのであるから、これは信者であろう筈もない。

坂東の一部では稲荷大神の御使である狐のことをおとうかと呼ぶ。とうかとは狐の別称、稲荷藤兵衛という二ツ名は、つまりは狐藤兵衛という意味なのであつた。

斯様な通り名があることから知る通り、藤兵衛は狐釣りの大名人として広く知られていた。洲中の狐という狐を獲り尽くすつもりなのではないかと噂され、その名は隣国は疎か、坂東一円に轟いていたという。

だが、藤兵衛は鉄砲も弓も使わない。

同じ獣でも狸は喰うことがあるが、狐の肉を喰うことはあまりない。

狐は主に毛皮を採る。皮に鉄砲瘡があると値が下がるから、狐は多く罌で獲る。

狐罌にも色々あるが、藤兵衛の使う罌は打締めと呼ばれるものであった。

打締めるとは挟むというような意味で、これは本来小鳥などを獲る際に使われる仕掛けなのである。篠を組み上げ、鳥が餌を啄むと上に渡した篠がすとんと落ちて鳥の頸を挟む——打締める——というものである。

藤兵衛はその篠を丸太や板に換え、狐用に作り換えたのであった。

餌は素揚げにした鼠や、鶏、鰯などであったというから、小鳥用と違ってそれなりに大振りなものなのだ。尤も鳥と違い、狐はそれなりに大きく、力もあり、何よりも知恵がある。単純な仕掛け罌に然う然う掛かるものではない。掛かっても重石が軽ければ抜けられてしまう。藤兵衛以外にも打締めのような仕組みの罌を使う猟師は多く居るが、必ずしもそれが狐を獲るのに向いた罌という訳ではない。

だが藤兵衛の場合は百発百中、必ず獲る。

勿論、罌自体にも工夫は凝らされているようだが、藤兵衛の名人たる所以はまた別にある。

罌は通常、獲物を通る道筋に仕掛けるか、餌などで獲物を誘き寄せせるものである。いずれにしても獲物が勝手に掛かるのを待つ——そうしたものだろう。

しかし藤兵衛の場合はそうではない。

藤兵衛は、罌のある場所まで狐を誘導して来るのである。

藤兵衛が果たしてどのようにして狐を見付け出し、それを引っ張つて来るものか、それは誰にも判らない。餌で釣るのか匂いで誘うのか、藤兵衛は兎に角狐を何処からともなく連れて来て、罌の前まで引き出すのである。そうなると狐は、鼻先の餌に目が眩み、まるで術にでも掛かったように自ら罌に嵌まるのだそうである。

俄には信じられぬ話であるが、狐が罌に掛かるところを見せてくれと頼むと藤兵衛は二つ返事で引き受けたし、実際に見物人の目の前で狐は罌に掛かったそうである。

目にした者は、一人や二人ではないという。

だから、嘘ではないのだ。

巷の噂では、藤兵衛は狐に化かされるのではなく、狐を化かすのだ——と謂われる。

近隣の在ではこう謂う。藤兵衛があまりにも多くの狐を獲るものだから、怒った狐が憎き藤兵衛に一矢報いてやろうぞと、ある時は女や童に化け、またある時は侍に化けて、次次に藤兵衛の許に現れるのだ——と。一族郎党の仇敵藤兵衛、命を取るまでは出来ずとも大恥をかかせてやることは出来ようぞ、狐釣りの大名人が化かされたとあつては名声も地に墮ちようぞ、然すれば廃業せざるを得なくもなろうぞ——ということであるらしい。

だから藤兵衛が独りになるや否や、狐の方から自ずと寄つて来るというのだ。

しかし藤兵衛は騙されるところか逆に狐を誑かし、罌まで引き連れて来ては返り討ちにするのだと、世人は謂う。

或る者は、藤兵衛は、狐の正体を見抜く眼力を持っているのだと説く。どんなに化け上手の狐であっても、藤兵衛には尻尾が見えてしまうというのだ。或いは、匂いで嗅ぎ分けるのだと言ひ張る者もいた。

藤兵衛はしかし、見抜いていてなお化かされた振りをして狐に話を合わせ、狐が腹を空かせて疲れ果てるまで彼方此方を連れ回すのだという。藤兵衛は十にも満たぬ時分に酒々井から多古までの往復十里ばかりもある道程を行き来していたという程の健脚であつたから、流石の狐も精根尽き果て化けの皮も剥がれてしまうということなのであろう。

本性が露見したことにも氣付かぬまま連れ回され、打締めの前に引き出され、好物の匂いに我を忘れた挙げ句、哀れ狐公は一卷の終わり——という寸法である。

藤兵衛のお蔭で成田街道沿いで狐に化かされる者は一人もいなくなったという評判まで立つた程である。

こうなると、もう噂というより拵えごととしか思えない。そもそも狐が人に変じることを前提とした咄なのであるから、真偽の程は知れようというもののである。とはいえ、信じる信じないに拘らず、狐狸の変化することは巷間に当たり前のように流布していたのであるから、藤兵衛が狐釣りの大名人である以上、こうした言説が広がるのも已むを得ないことであつたかもしれぬ。だが、しかし。

この巷説には、裏があるのだ。

慥かに、藤兵衛は腕の良い狐猟師である。だが藤兵衛にはもう一つ別の渡世がある。

一部でそれは、洞観屋どうかんやと呼ばれている。

洞観とは正体を見透かす、本質を見定めるといふような意味の言葉であるが、その通り、藤兵衛は嘘うそやまやかいしを見破ることに長けた男なのであった。

悪戯いたづらの釈明いいたづけも浮気亭主うきやうしゅの弁明いひわけも、博奕ばくちのいかさまも即座に見抜く。世辞も方便も一切通用しない。誤魔化ごまかしも利かないし隠しごともない。

ただそれは、神通力じんずうりきのようなものではない。藤兵衛は貧しい小作の四男で、極めて無信心であり、修行も何もしていない。ならば靈験れいげんのようなものである筈もないだろう。藤兵衛というのは幼い頃から目端めはしが利く、小賢こさかしい小僧であつたようである。藤兵衛は、観て、聴いて、嗅いで、調べて考えて嘘を見破る——そうした性質たの男なのである。

だから身の周りで怪しげな話が持ち上がった時、その性質たを知る者は藤兵衛を頼ることが多かったという。

藤兵衛は役に立つたのだ。

詐欺を未然に防ぎ、科人とくにんの罪を暴く男がいるという風聞はそのうち宿場役人の耳にも届くことになった。やがて藤兵衛は奉行所や代官所からも非公式に呼ばれるようになった。

しかし藤兵衛はお上かみからの仕事を好まなかつた。

藤兵衛が嘘を見破るのは身近な者の助けになると思えばこそのことなのだ。幾いくら世のためご政道のためとはいえ、頼まれるなら兎とも角かくも、命じられ無理を押してまでするようなことではないという肚はらだつたものか。

罪人の虚言を看破したり証人の偽証を覆したりすることは藤兵衛の性に合わなかったのかもしれない、己の言葉で徒に罪人が増えることが厭だったのかもしれない。高飛車な役人の態度や扱いの悪さが氣に入らなかつたか。もしかすると、単に謝礼金が少なかつたから——なのかもしれない。

いや、それはそうだったのだろう。

何故なら、藤兵衛は商人などからの依頼の方は快く引き受けていたからである。

褒められたことではなからうが、商売に騙し合ひは付きものである。やれ取引先の素性が怪しいの、やれ条件に嘘偽りがあるやもしれぬのと——そうしたことの真偽を見極められるか否かは商売の上で逆も大きな問題となる。しかし商売は丁丁発止、手の裡を明かさずに相手の肚を探るのは容易なことではない。

そこで、藤兵衛に目を付けた商売人がいたのだ。

藤兵衛の働き振りは見事なものであったという。

遠方近在を問わず旺盛に歩き廻り、得意の嗅覚で諸諸を嗅ぎ出し眼力で見透かして、事細かに調べ上げるのだ。

企みごと隠しごと、旧悪醜聞凡てを暴き出し、その上で商談の可否を見定める。藤兵衛の目筋は確かで、見立てに間違ひはなかつたという。

依頼人の洞観屋に対する信頼は厚く、その信頼に値するだけの手間賃が藤兵衛には与えられたらしい。

そもそも洞観屋というのは頼む方が勝手に名付けたものであり、そんな名前の渡世は他にはない。当然相場のようなものがある訳もない。

それでも藤兵衛は、時に二十両三十両という纏まった金子を受け取っていたようである。

それだけの大枚を叩いてもまだ釣りが来る程の儲けが雇い主にはあつた——ということでもあろう。

但し、商人達は決して藤兵衛との関わりを表沙汰にはしなかった。別に法に背くような行いではないし、隠す必要はない。藤兵衛も洞観屋の看板を出していた訳ではないから、喧伝せねば知れるものでもない。それでも洞観屋との接触は隠密裏に行われるのが常であつた。

理由は明快である。商売敵に雇われてしまつては元も子もないからだ。相手方の嘘は見破りたいけれども、自分の嘘は見破られたくない。洞観屋との接触は表向き秘しておかねばならないのだ。藤兵衛は、山獺師持つところの隠し弾のようなものだ。それ故の高额報酬でもあつたろう。或いは、その額面には口止め料も含まれていたのやもしれぬ。

藤兵衛の方もそこは心得たもので、洞観屋のことは暖気にも出さなかつたから、酒々井の者は勿論、近在一円で藤兵衛の裏の渡世を知る者は——依頼した商人を除けば、誰一人居ないのだつた。宿場の者達は大金を手にした藤兵衛を目にしても、またぞろ沢山狐を獲つたのだろうと考えたのだらう。下総中の狐を獲り尽くそうとしているなどという荒唐無稽な噂が広がったのも、それ故であつたやもしれぬ。

実際、藤兵衛は洞観の仕事で遠出をした帰りにも必ず狐を獲つて戻つた。

水戸まで出向いた際は女化おなばけの原はらから化け狐を連れ出し、十里みちのりもの道程を引き回して家の傍そばの打締めに掛けたのだと豪語したものである。それも強あながち嘘ではなかったようで、罫には大きな古狐が掛かつていたという。

藤兵衛の表看板はあくまで狐釣り、その評判通り狐はたとと獲つていたのだ。狐の害がある村村からも引き切りなしに狐討伐の依頼はあつて、そちらの方も藤兵衛は喜んで引き受けていた。そして必ず望まれた以上の狐を獲つた。

藤兵衛が狐釣りの大名人であることは確実なのだ。

商人どもはどうかとは洞観なまの訛なまつたものだと思つていた節もあるのだけれど、洞観屋はあくまで裏渡世、藤兵衛は矢張り稲荷とうか藤兵衛なのである。それでも人の口に戸は閉たてられぬものらしく、洞観屋藤兵衛の噂の方も、口伝くちづてに、しかし密ひそやかに広がつていたと思われる。

掬さく——。

酒々井宿は佐倉藩さくらの領内にある。

佐倉藩の藩士に、山崎やまざき由良治ゆらじという侍が居た。

山崎は郡奉行手代こおりという身分であり、飢饉ききんによる窮乏の末に子を問引きする者が跡を絶たぬことを憂え、自ら陰徳講なる講を立ち上げ、藩の認可を取り付けて、領内の人口減少に歯止めをかけんと民百姓の出産育児救済に奔走した義人でもあつた。

出世には縁がないという様子ではあつたが、藩主の覚えも目出度めでたく、遣り手やりてとして知られた男であつた。

一方、この山崎は腕っ節が滅法強く、無頼無法者には大層厳しかった。だからそうした面しか知らぬ者には、粗暴で厳格な、鬼のような役人だと思われていたようである。

この山崎由良治と、稲荷藤兵衛が密会しているという妙な噂が立ったのは、天保十年の暮れ間際のことであつた。

実に妙な取り合わせである。狐釣りと奉行手代に何ひとつ接点はない。

しかし、二人が話をしているところを見たという者は、日を違えて複数いたのだ。一度なら見間違ひということもあるが、二度三度となると話は別である。藤兵衛の生まれ在所である墨村、そして人氣の少ない七栄の原や本佐倉の城址の辺りで、二人は向き合つて揉めていたというのである。

これは徒ごとではなからうと、親しい者がその噂の真偽を質してみたところ、藤兵衛は、

「それは狐だ」

と答えたという。

「ナニ、妙なところどつ捕まつて、作物を育む百姓の出であり乍ら好んで生類を殺めるとは真にけしからんと、それらしいことを宣うから一度は畏まったが、この藤兵衛の目と鼻は誤魔化せぬ。へいへいと話を合わせつつ、鰯を落とせば髭が出る、鶏を見せれば尻尾が出るのお粗末さ。毘まで引き寄せ素揚げの鼠を目にした途端、本性を現して一巻の終わりじや。藤蔓を腰に巻き古竹を二本差しに見せ掛けた、古狐よ」

藤兵衛はそう言つて大笑した。

しかしその一度で罨に掛けてしまったというのであれば、二度三度見掛けたというのは得心が行かぬ。そう問ひ質すと、だからこそ狐なのじやと藤兵衛は答えた。

「本物であれば一人しか居るまい。幾度釣ろうと出て来るからこそ狐なのよ。どれだけ知恵が回ろうとも、畜生は浅ましきもの、同じ手で何度も俺を化かそうとするのだ。もう狐の山崎様は、四度も俺の打締めで命を落としておるわい」

藤兵衛はそう言つて、更に笑つた。

だがその数日後。

藤兵衛はぷつりと姿を消した。

本物の山崎由良治に斬られたのだという噂が立つた。

それこそが狐の狙い、凡てはけだもの、^{すべ}が自が命を張つた罨であつた——というのである。

幾度も同じ人物に化けて近付けば、さしもの藤兵衛も気が緩む。最後の最後に本物と遇わせれば、またぞろ狐と思ひ込み、礼を欠いた対応をするに違ひなからう。相手は他ならぬ鬼の山崎由良治、獵人風情が馴れ馴れしき態度を取つたなら只では済むまい。召し捕られるか、あわよくば無礼打ちにもなろうぞと——そうした算段であらうというのだ。

尤もらしい言い分ではあるものの、これも狐が化けることを前提とした与太咄には違ひあるまい。そのままを信じる者がどれ程居たかは判らぬことである。

とはいうものの、その後も稲荷藤兵衛の行方は杳として知れなかつたのである。

2

これは上意であるぞと山崎は言つた。

「上も下もなからうて。儂はご定法に背くようなことをした覚えはないわ。狐釣つて皮剥いで売つてただけだ。そりや別にご法度じゃあなかんべえ」

藤兵衛は鼻白む。

「罪に問おうというのではない」

山崎は声を荒らげることもなく、反対に少し笑つた。

「判るのであらう藤兵衛。此度の拙者の話、嘘はあるか」

「何だと——」

最初に声を掛けられたのは、墨村の親類の家に行つた帰りのことだつた。山崎という侍の名は識つていたものの、藤兵衛は顔を知つていた訳ではないから、当惑した。

その時山崎はこう言つた。

此度、郡奉行よりお触れが出された、領内での狩猟殺生には鑑札の取得が必要となる故、沙汰あるまで殺生は罷りならぬ、即刻狐を獲ることを——。

止めよ——。

噓だ。

触れ書きも回っていないし高札も立っていない。村役人からの呼び出しもない。そんな話は聞いたことがない。縦^よんばそれが事実だったとして、それを報^しせるのは山崎の役目ではあるまい。仮にそうだったのだとしても、小者^{こもの}も連れず独りで来ることなどない。いや、そもそも獵人一人一人の許を尋ね歩いて報せる訳もない。況^{まじ}てや出先まで追ひ掛けて来るなどあり得ないことである。

しかも、既に夕暮れだった。

出任せを言うなと一蹴^{いっしゅう}した。山崎は暫^{しば}く弁明めいた繰り言を述べていたが、相手にしなかった。帰ると言っても止め^とめなかつたので、帰った。

二度目は七栄で狐を釣^とった後だった。

山崎は茫漠^{ぼうばく}とした野原に立ち、藤兵衛の行く手を阻^{はら}んだ。

そして、高く買うからその狐を売ってくれと言った。

噓だ。

これも即断した。毛皮を売れというのならまだ解る。だが獲^とったばかりの狐を侍が買い取つてどうしようというのか。藤兵衛が巫山^{ふざけ}戯^けるなと言うと、山崎は巫山戯^{ふざけ}てなどいないと喰^くい下^{くだ}がり、売^うらぬと言うと今度は狐を獲^とるところを見せろと言^い出した。

それも断ると、どうしても見^みたい見^みせろと言^いう。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。